



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 辻隆太朗著『世界の陰謀論を読み解くーユダヤ・フリーメーソン・イルミナティー』（講談社新書、二〇一二年）                               |
| Author(s)        | 奥山, 史亮; Okuyama, F.   |
| Citation         | 基督教學, 48, 45-49   |
| Issue Date       | 2013-07-12  |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/62409">https://hdl.handle.net/2115/62409</a> |
| Type             | other   |
| File Information | 06okuyama.pdf   |



論文の信ぴょう性の低さという点を別にすれば、本書の知見はエリアードに対するこの点での断罪に対しては無力だろう。この問題に関しては鉄衛団自体の研究の深化の必要性や資料上の困難もあるだろうが、一層の進展を期待したい。

書  
評

辻隆太郎著

『世界の陰謀論を読み解く』

―ユダヤ・フリーメイソン・

イルミナティー―』

(講談社新書、二〇一二年)

奥山史亮

本書は、二〇一二年二月の刊行以来、複数のマスメディアで取りあげられ、再版するほどの売れ行きをみせている。陰謀論という、身近に存在するがまとまったかたちで研究対象とされにくい現象を取りあげている主題の面白さが人気の理由であろう。本書は、研究者が利用するための学術書ではなく新書であるため、数多くの一般読者の手に行き渡り陰謀論に関する情報を広めることを目的としている。したがって、陰謀論に関して調査した

経験もなく、新書の出版事情も把握していない評者が本書を適切に評価できるか心許ないが、本書の特徴をよりいっそう明らかにするために、気付いた点をいくつかまとめてみたい。まず、本書の構成は以下のとおりである。

「はじめに 世界は陰謀に満ちている」において、著者は本書の主題である陰謀論を以下のように定義する。「①ある事象についての一般的に受け入れられた説明を拒絶し、②その事象の原因や結果を陰謀という説明に一次的に還元する、③真面目に検討するに値しない奇妙で不合理な主張とみなされる諸理論」（五頁）。このような陰謀論が古来より語り継がれてきたという事実を踏まえ、さまざまな時代と地域の陰謀論者たちの言論的特徴を明確化すること、および陰謀論が流布する原因を解明することを本書は目的としている。

第一章「日本—コンスピラシー・セオリー—イン・ジャパン—」では、オウム真理教や日本のユダヤ陰謀論、地震兵器説について、いずれも学術的な根拠を有さないにもかかわらず広く受け入れられたという事実を強調しながら概観している。その上でインターネットの普及によ

り「自分にとつて都合のよい情報」「信じたいものを信じるための情報」を容易に入手できる環境が、陰謀論の流布を促進している可能性を指摘している。

第二章「ユダヤ—近代陰謀論の誕生—」では、今日のユダヤ人陰謀論の形成過程で大きな役割を果たした『シオン賢者の議定書（プロトコル）』、『タルムード』に関する陰謀論者の解釈を紹介したあとで、陰謀論におけるユダヤ人のイメージが四つに大別できることを指摘する（一、社会の内部に潜む異端者、邪悪な異教徒。二、ずる賢く利己的な金の亡者、天性の商人。三、国家に忠誠を誓わない「国際主義者」。四、既存秩序を破壊する近代主義の象徴）。そして、キリスト教社会にとつてユダヤ人が身近な「隣人」にして異質な「よそ者」であったことがユダヤ人陰謀論形成の苗床になった可能性を示している。

第三章「フリーメイソン—新しい「知」への反発—」では、フリーメイソンに関する陰謀論を、フランス革命やアメリカ独立革命との関わり、一八世紀の啓蒙主義、神秘主義との関係を踏まえながら紹介している。その上

でフリーメーソン陰謀論が、大きな社会変化にともなう混乱を理解可能なものとする道具としての役割を果たしてきた可能性を示している。

第四章「イルミナティ―陰謀論が世界を覆う―」では、国際連合やローマ・クラブなどのあらゆる組織を傘下に置き、フリーメーソンを実行部隊として使役する、巨大な秘密結社イルミナティを紹介している。イルミナティは、文化相対主義、教会一致運動、宗教間対話、フェミニズムなどの文化潮流を促進することで伝統的秩序を破壊し、それに代わる新たな統一世界政府の樹立を目的としている（あるいはすでに樹立している）という。イルミナティ陰謀論の特徴は、歴史上のさまざまな出来事や集団がひとつの陰謀に統合され、その陰謀によって世界がコントロールされていると考える点にある。このような陰謀論が流布する背景には、グローバリゼーションにより国家の力が相対化され、世界を動かす「主体」が見え難くなった情勢があるという。

第五章「アメリカ―陰謀論の最前線―」では、アメリカの陰謀論について、保守的なキリスト教信仰を中心に

概観している。とりわけ、アメリカ陰謀論の典型的かつ重要なサンプルとして、著名なテレビ伝道師パット・ロバートソンを取りあげている。著者は、グローバリゼーションを反キリスト教＝共産主義の世界征服陰謀と見なす点にロバートソンの言論的特徴を見ている。これは急進的福音派・ファンダメンタリストの言論と重なるものであり、移民やマイノリティに対するアンチテーゼとしての役割も果たしてきたという。

第六章「陰謀論の論理―なぜ私たちは陰謀論を求めるのか―」では、これまでの考察を踏まえ、陰謀論に共通する思考パターンと陰謀論との付き合い方について、著者の見解が示されている。著者によれば、陰謀論とは、自己の価値観が社会の現状から乖離している状況に折り合いをつけるための解釈枠組みのひとつであるという。自己の価値観と社会の現状が完全に一致するようなことは、まず起こりえない。しかし陰謀論は、自己の価値観が正しく世界の現状が誤っていることを、確固たる論拠を示すことなく展開する点に特徴がある。国家や共同体の判断が常に正しいとは限らず、それに懐疑を向けるこ

とは時に必要である。しかし陰謀論者は、自らの依拠している情報や判断が適切であるか否かを問わない点で、「健全な懐疑」とは区別されるという。

以上、本書の内容を簡単にではあるがまとめてみた。いうまでもなく、本書が有する豊かな内容は評者の紹介程度に尽きるものではない。以下では、評者なりに気付いた点を三つほど示すことにする。

第一に、本書のタイトルは『世界の陰謀論を読み解く——ユダヤ・フリーメイソン・イルミナティ——』であるが、取り上げられている地域は日本やアメリカ、西欧諸国に偏っており、タイトルと内容が一致しているとはいえない。「世界の」という言葉をタイトルにいれるならば、取りあげる領域をよりいっそう広げるべきである。

第二に、特定の個人が陰謀論を展開する事例と、オウム真理教のような集団的運動の中で陰謀論が展開される事例を区別して論じる必要はないであろうか。著者がいうように、誰もが陰謀論的な思考に陥る可能性があることには評者も同意する。しかし、陰謀論的思考に陥った諸個人が集団を形成し、目的を共有する運動を継続的に

展開する場合には、個人が陰謀論に陥る場合とは異なる成立要因があるように思える。

第三に、本書は、陰謀論者の自身の信念に対する懐疑について、十分な考察をしていないと思われる。本書によれば、自らの価値観が「正しい」という陰謀論者の確信はきわめて強く、その論理の内においては「ほとんど自然法則と同等な普遍的、絶対的価値が与えられる」（二四九頁）という。しかし、そのような強い信念を長期的に保持することは可能であろうか。保持することができず、陰謀論をすてる人間も数多く存在するのではなからうか。陰謀論者として生きることが、おそらく、さまざまなリスクを負うことになる。例えば、陰謀論者が価値観を共有しない他者と継続的な信頼関係を築くことは非常に困難であろうことが予想される。陰謀論者としての信念を通そうとすればするほど、社会の「常識」から遠ざかることになる。そのことにより、仕事の遂行に支障をきたしたり、家族や恋人が離れていったりする可能性がある。インターネット等で「常識」からあまりにも乖離した見解を公にしていた場合には、職業に就くこ

とすら困難であるかもしれない。家庭をもっている陰謀論者は、配偶者や子どもまでもが非難にさらされるかもしれない。そうなった場合に、自らの信念に対する懐疑が微塵も芽生えないなどということがあるだろうか。

確かに本書が述べているように、「陰謀論者たちは、自分の主張が認められないのは、それがまちがっていたり、論評に値しないからではなく、大衆が陰謀に洗脳されているからであり、真実を見抜いたがゆえに陰謀勢力に弾圧を受けているからだ、と考える」（二五八頁）傾向にあるのかもしれない。しかし危険視されることもあのような言論を長期的に展開することは、想像するよりもはるかに困難なはずである。そのような困難に陰謀論のセオリー通りに対処できる優秀な陰謀論者が多数派であるのか少数派であるのか、あらためて調査してみる必要があるように思う。

以上、読み足りないと感じたところを三点指摘したが、本書の意義は研究対象とされにくい陰謀論という現象について幅広く紹介し、そこに共通する特徴を明確化した点にある。本書が陰謀論を知るための必読書になった

ことは疑いない。今後は、宗教学や社会学の成果を用いながら本書の内容を改めて整理し、研究が継続されることを切望する次第である。